

## エッセイ 楽しい“虫音楽”の世界（その5 たくさんの蝶が飛ぶ曲）

昆虫芸術研究家

柏田 雄三（かしわだ ゆうぞう）

ロベルト・シュトルツ（1880～1975）はオペレッタの作曲家、指揮者として活躍したオーストリアの人で、《20の花》は＜マーガレット＞＜エーデルワイス＞等花の名前の小曲20からなる素敵な歌曲集である。同じような趣向の曲に若い娘たちを矢車菊や睡蓮等に喩えたドイツのリヒャルト・シュトラウス（1864～1949）の歌曲集《乙女の花》がある。フランスのダリウス・ミヨー（1892～1974）の歌曲《花のカatalog》は7種類の花の販売カタログのうたい文句をそのまま歌詞にした。花が咲く時刻の順に七つの花の曲を並べたフランスのジャン・フランセ（1912～97）のオーボエと管弦楽のための《花時計》もお洒落だ。ほかにフィンランドのジャン・シベリウス（1865～1957）のピアノ曲集《花の組曲》、さらには前回《インセクタリウム》で取り上げたデンマークのルーズ・ランゴー（1893～1952）によるピアノ曲集《花の描写》など花の曲集は枚挙にいとまがない。

日本にも三木 稔（1930～2011）に馬子唄のような＜ばれいしょの花＞など14曲からなる歌曲《花ものがたり》、病を得たのち左手のピアニストとして再起を果たした館野 泉のために林 光（1931～2012）が作った《花の図鑑・前奏曲集》という独創的な曲集がある。

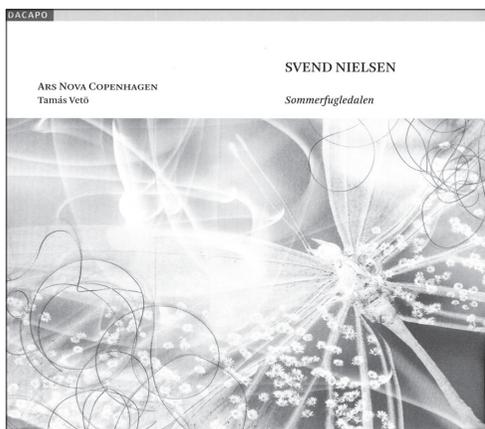
これらに比べ昆虫を題材にした曲集は分が悪そうだ。前回取り上げたランゴー、ヴィルシャーたちの《インセクタリウム》やロジャー・スッチー（1956～）による《虫たち》は昆虫たちの曲ではあるが、説明的な雰囲気も多く纏うし、昆虫ではない節足動物も混じっている。

そのようななかで出会ったのがデンマークのスヴェン・ニールセン（1937～）の《Sommerfugledalen（蝶の谷）》である。この曲はレクイエムで静謐な雰囲気を持つ。詩はノーベル賞候補にもなったデンマークの女性詩人インガ・クリステンセンによるソネット（14行詩）で、次のような蝶と蛾の名前が並ぶ。ベニシジミ、オオイチモンジ、キアゲハ、オオアカタテハ、チョウセンギンボシセセリ、ドクロメンガタズメ、モンシロチョウ、イガ、カイコガ、モウセンガ、ヤガ、ルリシジミ、キベリタテハ、クジャクチョウ、フチグロベニシジミ、セイヨウシジミタテハ、セイヨウスグリシロエダシヤク、ヤナギドクガ、クモマツマキチョウ、ヒメアカタテハ、ムラサキエダシヤク、チョウセンコムラサキ、ナミスジフユナミシヤク、カバエダシヤク、ヒメシロチョウ、シンジュガ、ミドリヒョウモン、アマダシジミ、ヒメヒオドシ等（田辺欧氏の訳文による）。

1991年に発表されたこの詩は多くの国際的な賞を受けたそうだ。ギリシャのロードス島の「蝶の谷」と呼ばれる観光名所に何kmにもわたって生息する蝶はヒトリガの一種らしいので、この詩や曲とは関係がない。

彼女はなぜこのように多くの蝶や蛾を取り上げたのか？詩は蝶や蛾の生態や形態も織り交ぜた哲学的な内容で容易には読み解けないが、蝶が持つと信じられた霊的なイメージが関係していることは間違いないだろう。CDの解説書には30種近くの綺麗な蝶や蛾の写真が綴じ込まれている。

注：デンマーク語には蝶と蛾を区別する単語がなくSommerfugleは双方を含むようである。曲は「蝶の谷」と訳される。



ニールセン 蝶の谷  
DACAPO 8.224706